

熱帯 バイオマス社会

調査報告

- サラワク官報・貿易統計の紹介
—地域経済史の構築に向けて—
小林 篤史…………… 1
- ラタンの工場見学
竹内 やよい…………… 8
- ## 関連活動記録
- 2014年4月第41回アブラヤシ研究会報告…………… 12
- プロジェクト参加メンバー紹介…………… 14

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (S)

東南アジア熱帯域における プランテーション型バイオマス社会の 総合的研究

アジアの貿易ハブ: シンガポールに集まる船舶群
(写真: 鮫島 弘光)



調査報告

サラワク官報・貿易統計の紹介 —地域経済史の構築に向けて—

小林 篤史（政策研究大学院大学）

サラワク初訪問を終えて

2014年1月29日から2月5日にかけて、筆者は初めてマレーシア・サラワク州を訪問した。ピンツルを拠点に、アブラヤシ・プランテーション見学、ロングハウス滞在、ボートによるクムナ川の遡上など多くの体験を得ることができた。

特に、近年まで河川交易の中継地として繁栄したとされるトゥバウを訪れた際（写真1）、その町の閑散とした様子が印象に残っている（旧正月に訪問したという理由もある）。それは大まかに言って、内陸に向かう幹線道路が政府によってある程度整備され、さらにトゥバウを寄港地としていた河川のエキスプレス・ボートが廃業したため、ヒトやモノの移動が別のルートをとるようになったことが原因であるようだ。流通経路の変化が、交易拠点として機能した一つの街の盛衰を左右したといえる。

その一方で、ピンツルから内陸に向かう幹線道路沿いには、いくつものアブラヤシ買取所が活況を呈し（写真2）、現地民によるアブラヤシ小農生産の活性化を象徴していた。これまでプランテーションを中心としていたアブラヤシの生産が、地域住民も巻き込みながら重要な産業へと発展していく様子を看取できた。この大きな流れを単純化していえば、河川交易から陸路・道路による流通へ、そして焼畑農耕や森林産物採集から外需向けのモノカルチャー農業へ、というサラワク地域経済の転換を想定できる。

ただ、流通の発達と生産体制の変化との対応関係はそれほど単純ではなく、現在でも「伝統的」な森林産物の採集が継続している側面もある。今回の視察ではピンツルのラタン工場を見学する機会を得たが、そこでは大量のラタンが加工され、出荷を待っている状態であった（写真3）。19世紀の段階からラタンは現地住民によって採集され、河川交易から沿岸交易につながる商人ネットワークによって輸出されていたサラワクの主要産品であり、これも単純化を恐れずに言えば、森林産物交易の持続性という特徴がみいだされる。概し

て、サラワク地域経済は世界市場における森林産物や農作物の需要の拡大に機微よく反応しながらも、域内で醸成されてきた地域経済のダイナミズムも、その都度、変化を伴いながら活性化する傾向がありそうである。

では、地域住民の生産活動に変化を与える世界経済からのインパクトの中で、現在のサラワク地域経済には過去からどういった性質が引き継がれ、一方で何が変わりつつあるのだろうか。また、近年の地域経済の変容が経済活動にとどまらず、地域住民のロングハウスからの離脱や食文化の変化といった社会や文化の側面にも影響を与えているならば、それを引き起こしている外来のインパクトが、何故、過去と比べてそれほど重大ものとなっているのかを歴史的観点から検討することは、地域住民の生存基盤の今後を考えるうえでも有益だろう。

以上のように、筆者はサラワクの現状を視察してみて、現在進行形の事象を考えるうえでも、歴史研究は有意義な視角を提起できると感じた。では、サラワク地域史の検証を進めるうえで、我々はどのような史料を用いることができるだろうか。このニュースレターでは、19世紀末から20世紀前半の期間、サラワク官報（Sarawak GazetteとSarawak Government Gazette）に収録された貿易統計の利用可能性について考察してみたい。

サラワク官報・貿易統計の捕捉範囲

1870年から発行され始めたサラワク官報には、太平洋戦争による日本占領期直前の1940年まで貿易統計が掲載されていた。いくつかの研究がこの貿易統計を



写真1: 対岸から眺めたトゥバウの街



写真 2: 道路沿いのアブラヤシ買取所



写真 3: ビンツルのラタン工場

用いているが、その性質・利用可能性について踏み込んだ考察はなされていない。ここで、その貿易統計の性質を探るうえで、先行研究によって提示された戦前のサラワク地域経済のモデルを参照しよう。なお、サラワク官報は、京都大学・東南アジア研究所図書室にマイクロフィルムで所蔵されているものを利用した。1920～1940年の貿易統計はイギリスのロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）に所蔵されているものを用いた。

図1はダニエル・チュー（Daniel Chew）によって提示された、19世紀から20世紀前半にかけて構築されたサラワクの流通ネットワークの概念図である。1841年のジェームス・ブルックによるサラワク王国の成立以降、その領土拡張とともにクチンを拠点とした華人商人ネットワークが、③河川交易を介して内陸まで伸長し、現地民との交易によって森林産物を獲得した。そしてそれら産物は、②沿岸交易によりクチンに運ばれ、そこからさらにシンガポールに輸出（①国際貿易）されることで世界市場に供給された。すなわち、この概念図は、19世紀に進展したサラワク地域経済と世界経済との接触の構造を表現している。本稿では、この流通ネットワークの構造と形成プロセスが、サラワク官報の貿易統計からどの程度復元できるのかを検討する。

まず、①国際貿易の内実は、サラワク官報の貿易統計からどこまで捕捉できるだろうか。サラワク官報とサラ

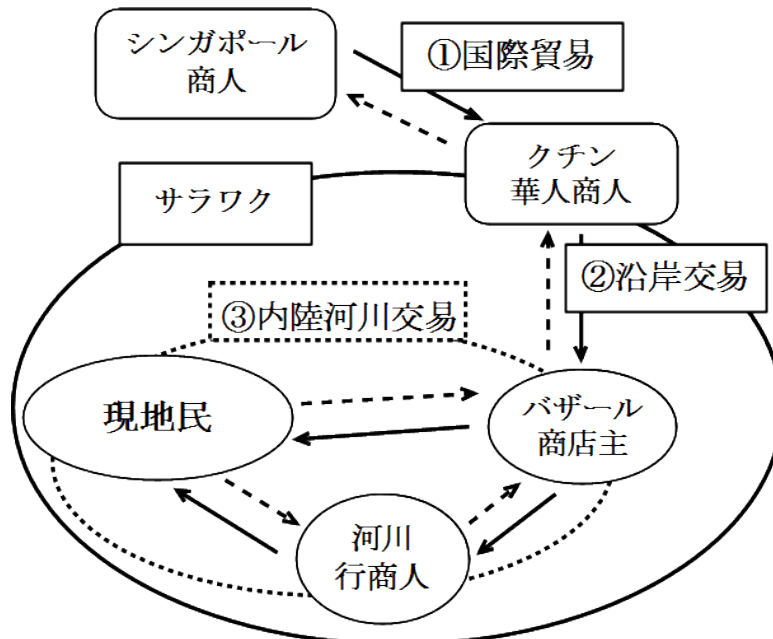


図1: 19世紀から20世紀前半におけるサラワクの流通ネットワーク
出所) Daniel Chew, 1990, Chinese Pioneers on the Sarawak Frontier 1841-1941, Singapore: Oxford University Press, Chapter 5.

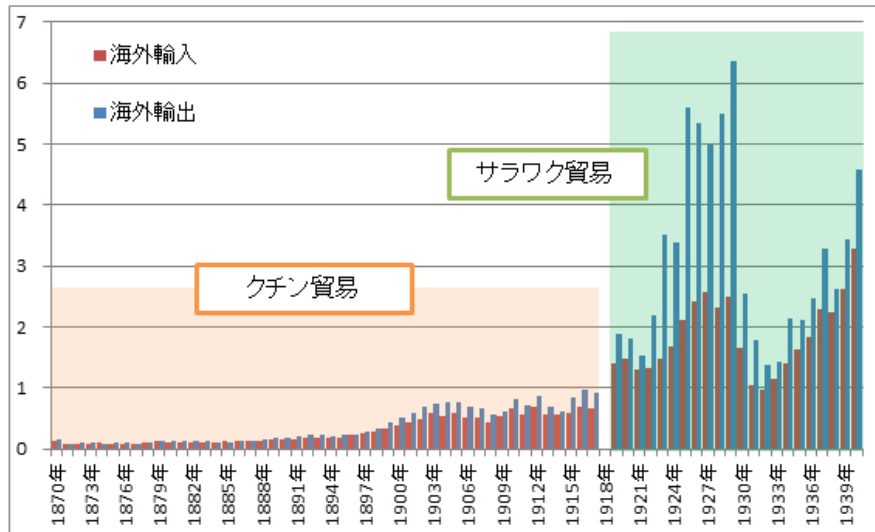


図2: サラワクにおける海外輸出入額 (1870 ~ 1940 年)
 単位) 千万ドル 出所) 1870 ~ 1907 年は Sarawak Gazette, Sarawak Trade Returns 各年より、1908 ~ 1917 年は Sarawak Government Gazette, Sarawak Trade Returns 各年より、1919 ~ 1940 年は Annual Report of the Department of Trade and Customs 各年より。注) 貨幣・貴金属含む。

ワク関税局による貿易統計から抽出した、1870 年から 1940 年にかけての海外輸出入額 (Foreign Imports & Exports) を示したのが図 2 である。ここからは、1918 年のみデータが欠落するが、通年でサラワクの国際貿易の規模と趨勢を捕捉することが可能である。また、基本的に海外輸出が輸入を上回っており、この期間、サラワクの貿易収支は黒字であった。

この貿易統計には一つ不備がある。それは、1870 年から 1917 年のデータはサラワクの貿易と表記されながらも、その範囲がはっきりしない点である。この期間、サラワク王国は領土拡張を進めており、ブルック政府が作成した貿易統計はクチンだけのものか、それとも獲得した領域も含まれるのかという問題は、統計データを用いる際に把握しておく必要がある。この点をサラワク官報の海外輸出とクチンの海外輸出を比較した図 3 から検討しよう。この図でサラワク官報の年次貿易統計の海外輸出額 (青の面グラフ) と、サラワク官報のクチン月次貿易統計から計算したクチンの海外輸出額 (赤の線グラフ) を並べると、両者の水準はほとんど一致している。両データの比較可能な期間は 1885 年から 1903 年までに限られるが、概して 1917 年までのサラワク官報掲載の貿易統計は、クチンの貿易として扱うのが適切であるといえる。一方、1919 年以降、関税局によって発行されるようになった貿易統計は、サラワク全体の国際貿易を掲載した。

さらに、この貿易統計のもう一つの限界が、地域別

の貿易額を捕捉できないことである。そのため、図 1 に示したサラワクの国際貿易の相手として、本当にシンガポールが重要であったのかをデータから確定できない。そこで、図 3 にサラワクの海外輸出額 (青の面グラフ) とともに、シンガポールの貿易統計から抽出したサラワクからの輸入額 (緑の棒グラフ) を並べた。つまり、サラワクの海外輸出のうち、シンガポールに向けた部分を示す。ここから、1870 年から 1899 年までのサラワクの海外輸出先はシンガポールがほとんどであったことがわかる。1900 年以降になるとシンガポールのシェアは低下したが、依然として重要な貿易相手であったといえる。図 3 では輸出のみを示したが、輸入額で見ても同様の傾向が読み取れる。やはり、サラワクの国際貿易の相手として、シンガポールが重要であったことは間違いないだろう。

サラワク官報の貿易統計からは、国際貿易の商品構成も捕捉できる。図 4 は 1870 年から 1904 年にかけて、サラワク (クチン) からどのような商品が海外に輸出されたのかを示す。この期間、サラワク官報の貿易統計には毎年 119 種類の商品の貿易額と量が掲載されており、それを筆者の商品に関する知識に沿って大まかに分類した。その内、熱帯林から現地民によって採集された天然樹脂 (グッタ・ペルカやジュルトンなど)、ラタン、その他多様な森林産物が重要な比率を占めている。また、華僑移民によって生産されたガンビル、胡椒、鉱物 (砂金やアンチモン)、も重要な輸出品であっ

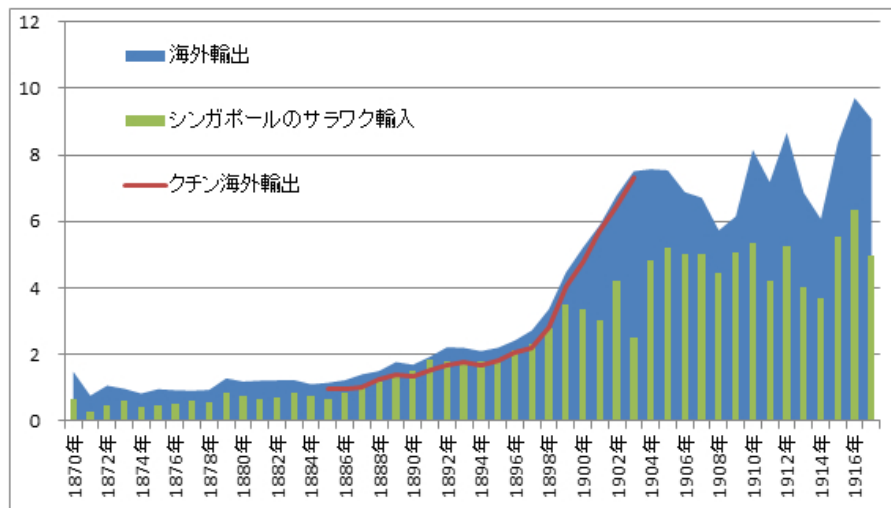


図3: サラワク海外輸出・クチン海外輸出・シンガポールのサラワク輸入 (1870～1917年) 単位) 百万ドル (出所) 海外輸出は図2に同じ。クチン海外輸出は Sarawak Gazette, Kuching Monthly Trade Returns 各月より、シンガポールのサラワク輸入は Blue Book for the Colony of Straits Settlements 各年より。注) 貨幣・貴金属含む。

た。現地民の重要な食料でもあったサゴも、西欧で消費される澱粉として輸出されていた。概して、19世紀末のサラワクは一次産品を海外に輸出していたことがわかる。

1905年以降、サラワク官報の商品別貿易統計はより詳細になるため、別の形で図5に示す。1905年から1940年まで、サラワクから海外へ輸出された160種類の商品を大まかに分類した。1905年からは石油が、1909年からは栽培ゴムが新たな商品としてリストアップされ、それらはサラワクの重要な輸出商品となっていく。

1920年以降はサラワク全体の輸出であり、石油のシェアが急増したのは油田が開発されたミリのデータが貿易統計に含まれるようになったためである。おそらく、クチンだけでみれば新商品の栽培ゴムとともに、旧来の森林産物、胡椒、そしてサゴなどの一次産品が依然として重要な輸出品であったと想定される。以上、図4と図5で示した海外輸出の商品構成と同様のものは、輸入についても抽出が可能であるが、その大部分は衣類や食料など大衆消費財が占めていたことを指摘しておく。

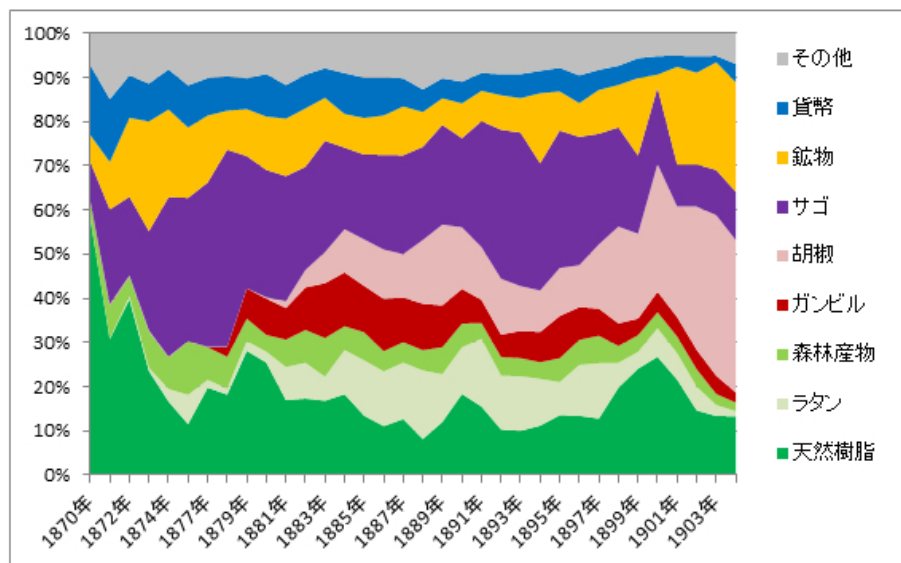


図4: サラワクの海外輸出商品 (1870～1904年) 出所) Sarawak Gazette, Sarawak Trade Returns 各年より。注) 比率はドルベース。1876年のデータ欠落。

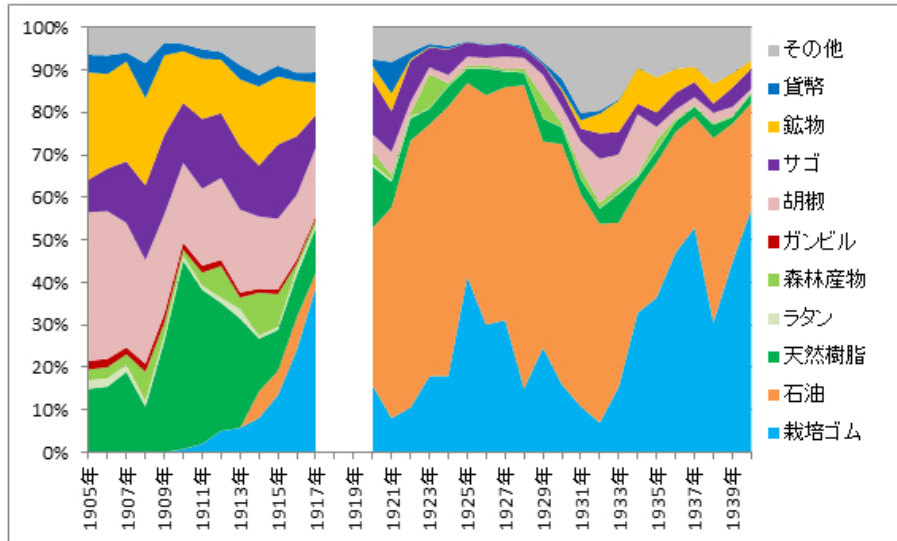


図5: サラワクの海外輸出商品 (1905 ~ 1940 年)
 出所) 1905 ~ 07 年は Sarawak Gazette, Sarawak Trade Returns 各年より。1908 ~ 1917 年は Sarawak Government Gazette, Sarawak Trade Returns 各年より。1920 ~ 1940 年は Annual Report of the Department of Trade and Customs 各年より。注) 比率はドルベース。

次に、サラワク官報の貿易統計による②沿岸取引の捕捉範囲である。図6はサラワク官報と関税局の貿易統計から抽出した、1870年から1930年にかけての沿岸取引額 (Coasting Imports & Exports) である。これは厳密にはクチンと沿岸諸港との間の移出入を示す。この図からは、全体的に沿岸移入が移出を上回っており、クチンの沿岸取引の収支は赤字であったことが分かる。

さらに、どういった商品が沿岸諸港からクチンに移入されていたのかを図7でみると、天然樹脂、ラタン、

サゴといった海外向けの一次産品が多く、これら商品は最終的にはクチンからシンガポールへ輸出されたと考えられる。つまり、貿易統計からは、クチンが沿岸取引と国際貿易をつなぐ中継港として機能した様子が捕捉できるのである。同様に、サラワク官報の貿易統計には、1905年以降の沿岸移出商品の詳細も掲載されている。また、沿岸移入の商品構成についても捕捉可能であることを指摘しておく。

サラワク官報の貿易統計からは、クチンの沿岸取引の相手がわからないという限界がある。しかし、サラワ

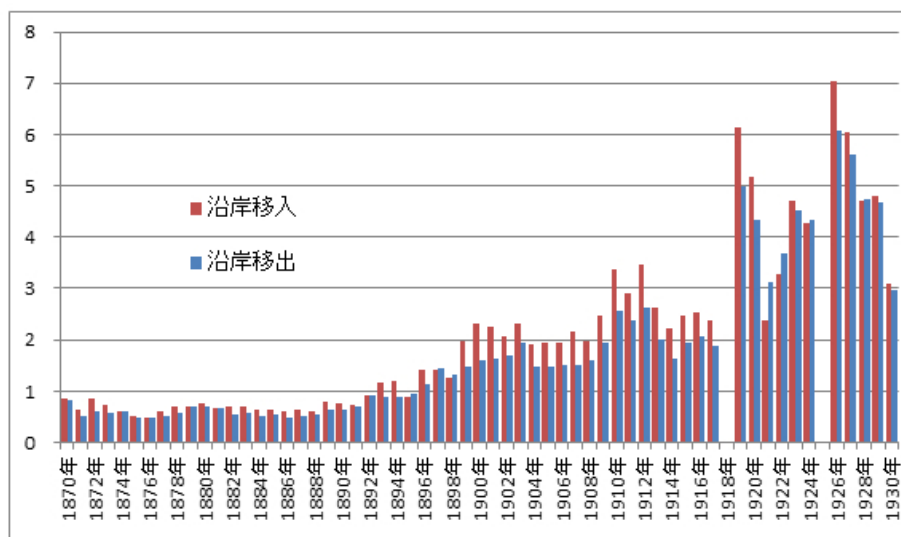


図6: サラワクにおける沿岸移出入額 (1870 ~ 1930 年)
 単位) 百万ドル 出所) 図2に同じ。注) 貨幣・貴金属含む。

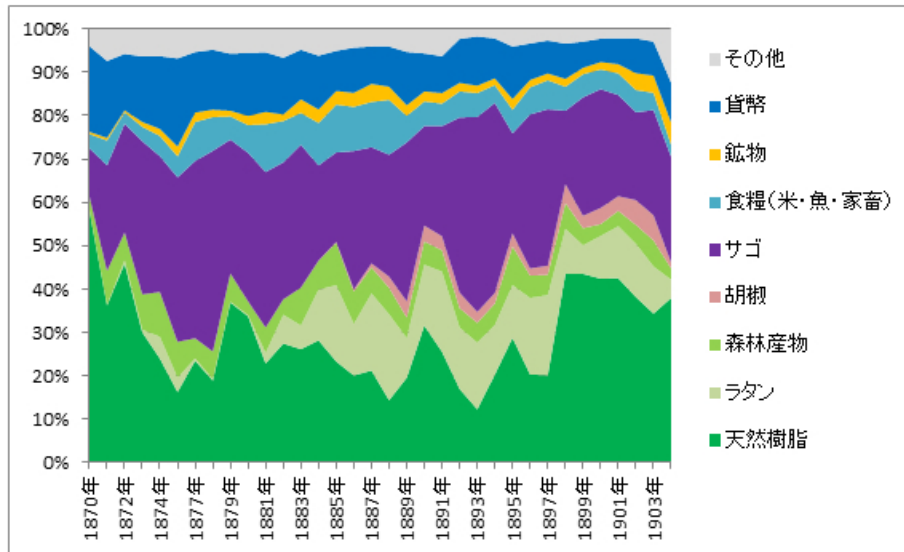


図7: サラワク・クチンの沿岸移入商品 (1870 ~ 1904 年)
出所) 図4に同じ。注) 比率はドルベース。1876年のデータ欠落。

ク官報に掲載された船舶統計 (Shipping) を用いれば、この不備を補うことができる。表1には19世紀末以降の各年で、クチンに沿岸諸港から入港した船舶数を示す。この表では、上から入港船舶数が多い出港地を並べた。Mukah、Sadong、Oya、Sibuといった第2管区 (Second District) からの来航数が多い傾向が読み取れる。船舶統計は出入港船舶の数を示すのみで交易额まではわからないが、この統計からクチンの沿岸交易の相手を推測することが可能となるだろう。また、船舶統計には各船の船長名が掲載されており、そこから沿岸交易の担い手を検証することも可能となるだろう。今後の課題としたい。

最後に、③内陸河川交易である。残念ながら、サラワク官報には内陸河川交易に関する体系的な貿易統計は掲載されていない。我々が河川交易を検証する際に利用できるのが、サラワク官報の管区報告 (District Report) であり、内陸部の商業情報も多数掲載されている。一例をあげると、1923年5月1日付のサラワク官報には、ピンツル地域におけるエンカバン・プームの様子が報告されている。

The kampongs...have been deserted, the inmates having all gone off to gather engkabang. From the bazaar also many Chinese have gone upriver to gather and also to buy from Dyaks and others. I think it is safe to say that the crop this year will be a record breaking one for this District, as reports from Tatau concerning the amount in that

river are equally favorable. I regret to hear that many pady farms have been abandoned by their owners, gathering engkabang being apparently more attractive than farming; of course these people will be losers in the long run.

(…は筆者省略)

数年に一度、結実するエンカバンの実は高く売れるため、村 (カンボン) の住民は皆その採集に出払って

出港地	1890年	1896年	1903年	1912年
Mukah	73	125	72	75
Sadong	28	37	66	178
Oya	60	111	69	57
Sibu	11	17	24	41
Limbang	13	22	25	27
Matu	13	15	23	21
Bintulu	22	19	14	
Baram	6	13	14	7
Rejang	2	1	3	26
Daro		5	16	9
Lingga	2	1	4	12
Tatau	2	4	6	1
Lundu	6	1	2	
Brooketon		4		3
Saeh			1	5
Simarang		5		
Balangian			3	
Kalaka			2	
Simatan		1	1	
Blantan		1		
Niah			1	
Pamangkat				1
Sebangan				1
Sandakan		1		
Simanggang		1		
沿岸諸港計	238	384	346	464

表1: クチンに入港した船舶数とその出港地 (1890 ~ 1912 年)
出所) Sarawak Gazette, Shipping 各年より。注) 原資料は蒸気船と帆船を分類しているが、本表では両者の合計を示す。

しまい、稲作は放棄されてしまうと行政官は嘆いている。今現在の現地民によるアブラヤシ生産への傾倒に似た現象は、この頃にも起こっていたのである。また、下流にあるバザールの華人商人たちも、エンカバンを現地民から買い取るため上流に向かったとされる。1923年のエンカバン一斉結実という商機は、内陸河川交易の活況をもたらしたといえる。

また、ピンツルに集められたエンカバンは、沿岸交易によってクチンに運ばれ、そこからさらにシンガポールへ輸出されたと予測される。サラワクからのエンカバンの海外輸出量を示した図8からは、1923年の記録的な輸出量の増加が分かる。内陸河川交易の活況が、沿岸交易、そして国際貿易に連鎖し、サラワクの流通ネットワーク全体が活性化したことが伺える。管区報告と貿易統計の組み合わせによって、こうした実証も可能となるだろう。

まとめ

図1に示したサラワクの流通ネットワークの復元は、①国際貿易と②沿岸交易の総輸出入額と商品構成については可能だということが明らかになった。しかし、地域別の貿易・交易の捕捉については不備があること、ただ、シンガポールの貿易統計やサラワク官報の船舶統計を併用することで、その不備を補うことは可能だということも判明した。一方で、③内陸河川交易については、サラワク官報にはその貿易統計が掲載されていないため、数量

的捕捉は困難だと結論付けられた。ただ、内陸部の商業活動の内実を検証するためには、サラワク官報の管区報告を読み込み、そこに記述された事象を国際貿易や沿岸交易のデータから裏付けるという作業の有効性も確認された。

しかしながら、貿易統計を用いた流通ネットワークの分析は、クチンを中心とした流通構造の検証に限られるということは認識すべきである。サラワク政府の本部はクチンにおかれ、サラワク官報の貿易統計はその政府によって作成されたため、その情報の捕捉範囲がクチンに偏ってしまうのは致し方ない。そして、1920年以降の貿易統計の捕捉範囲の拡大は、1917年のヴァイナー政権の開始による統治体制の変化と関連している可能性が高いだろう。いわば、図1の流通ネットワークのモデルも、基本史料となるサラワク官報の性質に導かれたものなのだといえる。一方で、このモデルから外れた流通ネットワークは、どのようなダイナミズムをみせたのだろうか。近世からこの地域の交易ハブとして繁栄したブルネイの流通ネットワークの拡大も否定できないし、さらにサラワク北東部ではフィリピンとの貿易も重要であったかもしれない。こうした史料の性質と、そこから零れ落ちたであろう実態を意識することで、サラワク地域経済の変容はより多面的に捉えられるだろう。

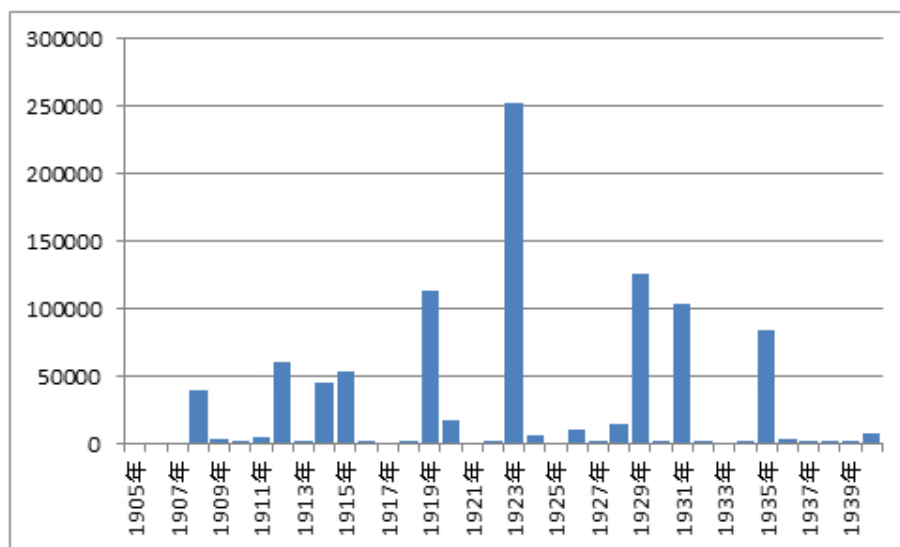


図8: サラワクにおけるエンカバンの海外輸出量 (1905 ~ 1940年)
単位) ピクル (60.478 kg) 出所) 図5に同じ。注) 貿易統計における商品名は Illipe-nuts である。

ラタンの工場見学

竹内 やよい (国立環境研究所)

ピンツルからミリ-ピンツル道路沿いに車を走らせると、12マイルの地点の道端で、ラタンのカゴが軒下に沢山つるされて売られているのを目にするだろう(写真1)。そこは、Rh. Mujahと呼ばれるイバンの村である。2013年11月、ラタンについて調査するために、その村を訪問した。道端の売り場でも、ラタンのカゴを編んでいるイバンの女性がいたので、そのラタンの種類やどこで採集したのかを聞いてみた。驚いたことに、そのラタンは自分で採集したものではなく、既に加工されたものを購入したというのだ(写真2)。よくよく聞いてみると、ピンツルのとある会社でカゴ編み用のラタンが売られているらしい。そのラタンの種類も分からないという。加工ラタンを売る会社とはどのようなものか興味があったので、その工場に行ってみることにした。

ラタン工場は、旧市街の南東、Kampong Baruの端にあった(写真3)。そこには、驚くべき光景があった…数千のラタンがその敷地内に所狭しと並べて干されていたのである(写真4)。ラタンは、森林産物の中でも、古くからの海外への交易の商品として価値のあるものであることは、文献でのみ知っていたが、今でも商品としてこれだけの量が取引されているとは、考えもつかなかった。この日は、17時を過ぎていて、事務所には既に入人がいなかったため、日を改めることにした。

翌日、もう一度事務所を訪問した。加工ラタンは、事務所の一角で売られていた。1kgRM30(写真5)。事務員の女性にこのラタンの種は何かを聞いてみたが、知らないとのことであった。事務所の前は、出荷用と思われるラタンがぎっしりと詰まれている、20人ほどの工員(インドネシア系と思われる)が、ラタンの仕分けや、重さを測る作業を行っていた。ラタンの作業場をウロウロしていると、中国系の男性が訝しげに近寄ってきた。ラタンに興味があって訪ねてきたと言うと、来週以降ならこの工場を案内してもいいと言っていた。この男性は、この工場のマネージャーで名前をタンさんというそうだ。残念ながら、すぐに帰国予定だったため、次回ピンツルの滞在時期に、という約束を取り付けた。今年の1月中旬、再びサラワクに到着した私は、すぐにタンさんと連絡を取った。そして中国正月前のある日、工場を再訪し、ラタン加工の現場の見学、ラタンの産業について話を聞くことができた。

タンさんは休暇前の最終出勤日で、多忙であったため、従兄のタンさんが主に工場内を案内していただいた。従兄のタンさんは、マレー半島のIpoh在住で、やはりラタン業に従事している。時々ピンツルに来て、仕事の手伝いをしているそうだ。ラタンは、タン一族のファミリービジネスで、父親もラタンの仕事をしていたという。半島では主に、polo stick用のラタンなどを扱っているそうである。



写真1: Rh. Mujah 道路沿いで売られているラタンのカゴ。



写真2: ピンツルで買ってきた、加工ラタン。表面の皮も削られているため光沢がない。



写真3: Kampong Baruにあるラタン工場

まず、ラタンの加工の工程を紹介していただいた。採集した生のラタンをディーゼル油で10-20分ほど煮る(写真6)。こうすることによって、耐久性が増し、20年ほど持つようになるそうだ。(ただし、segaと呼ばれる種類はこの工程は必要ない)。以前は、この工程を行わず出荷していたそうであるが、タンさんが仕事に従事したころ(30年ほど前)から行うようになった。煮た後は、水につけて洗浄し(写真7)、天日で干す。晴天下約1週間-10日ほどで乾燥が完了する。私が訪問した1月中旬は、12月からの雨天の影響で、ラタンの幹が黒色化していた(写真8)。これは、質の劣化を意味する。ラタン加工には好天が必須条件であるそうだ。乾燥後、節を滑らかにする(写真9)。

次に、ラタンの種と等級(質)に仕分ける。等級は1級から7級まであり、種にはよらない。皮がなめらかで、堅いものほど上質とされる。材の齢が古いものほど質がよくなるそうだ。若くて幹が細いものは質的には5級以下になることが多くなる。よいラタン材は、15年生以上のものである。このようなラタンを見つけるのは、現在は困難であろうと思われる。

この工場で扱うラタン全体量のうち、サラワク産が70%、フィリピン産30%であるそうだ。サラワク内のラタンは、Tatau, Tubau, Batu Niah, Sibul, Bekunu, Kuchingにいる中国系の中間業者が、先住民より買い付けてくる。ラタン採集の位置を訪ねたが、中間業者

に任せているため、詳しくは知らないそうである。ここで取り扱われているラタンの種は、サラワクで3種、フィリピン3種、半島、インドネシアの1種であるそうだ(表1, 写真10-13)。

主な輸出先は、シンガポールと中国である。シンガポールからは、さらに世界各地(中東、欧州)に輸出される。加工量としては、30-40トン/月、300-400トン/年で、相場をみながら決定している。加工量は、15年前に比べて40%ほど減っているが、ラタンの値段はほぼ変わっていない。ラタンビジネスは、20年前は好況だったそうだ。現在のラタンの不況は、中国の安い家具に押されるのが原因だという。世界全体での生産量はインドネシア80%、ボルネオ10%、半島マレーシア10%である。

カゴ編み用に売り出している加工ラタンの種は、tunggal(現地名)だそうだ。この種は、イバンの人々がよく利用する種類の一つである。加工ラタンは、事務所で売のみで、輸出はしていない。現在、1kg=RM30で、~500kg/月ほど生産している。会社の中の販売取引量としては、それほど多くない。Rh. Mujahのカゴを編む女性は20人ほどいるが、そのほぼ全員がこの加工ラタンを使っていた。(最近訪ねたRh. Jusong(Penan, Jelalnog)の女性もこの存在を知っていて、買ったことがあると言っていた。)また、ピンツル市内の市場で見かけるラタンのカゴも、この加工ラタンを使ったものがほとんどである。イバンの人々がこの会社の利益に貢献しているとは言えないが、この工場がイバンのラタン編みの文化や経済に与える影響は大きいだろう。



写真4: 工場内の敷地は、数千本(万本?)が干されている。



写真5: Rh. Mujahの人々が使っていたラタンは1kg=RM30で売られていた。



写真6: ディーゼル油で煮る。



写真 7 : 洗浄層。



写真 8 : 天日干し。雨が多かったため、幹が黒くなっている(質の低下)。



写真 9 : 表面の節を滑らかにする。



写真 10: フィリピンからのラタン:黄色テープ Kalapit, 青色 Batu(左)Palasan(右)



写真 11: サラワクのラタン Semanbu 3 級品。滑らかな表面で堅い材。



写真12：半島のラタン、Manau。



写真13：下のラタンは、細すぎて規格外。



写真14：今回工場を案内してくれたタンさん従兄弟。後ろのSemambuは1級。

この工場では取り扱われる輸出用ラタンは、イバンの人々が森で採集し、よくカゴ編みに使用する材よりも太めでしっかりしたものである。家具の骨組などにも利用でき、また加工しやすい材なのだろう。しかしながら、Jelalong 地域の森林を調査していても、この工場にあるような太いラタンを見つける頻度は非常に少ない。この工場のラタンは、サラワクのどこから来ているのだろうか？これまで、Jelalong の村でラタンそのものをこういった工場に売っている話は聞いたことはなかった。この数

千本のラタンは、サラワクの奥地からのものなのだろうか。しかし、現在は森林が減って、ラタンの調達が難しくなっているという。今回の見学で、タンさんが言った“Less forest, Less cane”という言葉が大変印象に残った。サラワクもこの数十年で森林が随分減少しているが、その影響がラタンの取引量などに関係していないだろうか？サラワクのラタンの流通、国際的な取引の動向など興味がある方、ぜひ共同研究をお願いいたします。

表1 工場では取扱いのあるラタンの種類		
地域	種名（ローカル名）	学名
サラワク	Semambu ¹⁾ Jelayang ²⁾ Tunggal	<i>Calamus scipionum</i> ³⁾ <i>Calamus ornatus</i> ³⁾ <i>Calamus comptus</i> ³⁾
フィリピン	Kalapit (Calapi) Palasan Batu	<i>Calamus microcarpus</i> ⁴⁾ <i>Calamus merrillii</i> ⁴⁾ <i>Calamus subnermis</i> ⁴⁾⁵⁾
マレー半島 インドネシア	Manau	<i>Calamus manan</i> ⁴⁾

脚注

- 1 英名 Melacca cane 幹が茶色い。
- 2 英名 White Malacca cane 幹が白く、中東でよく使われる。
- 3 学名は H. Christensan (2002) Ethnobotany of the Iban & the Kelabit より。ただし、一つのローカル名に対して複数種含まれる場合がある。
- 4 学名は J. Dransfield & N. Manokaran (1993) PROSEA : Plant Resources of South-East Asia 6, Rattans より。
- 5 Batu はマレー名。Batu と呼ばれる種は複数種存在する。

関連活動記録

2014年4月 第41回アブラヤシ研究会報告

2014年4月19日（土）に、京都大学稲盛財団記念館3階中会議室において、第41回アブラヤシ研究会が開催された。今回の研究会は、主宰者の林田秀樹・同志社大学准教授から、本科研のメンバーを中心に構成するように依頼され、開催に至ったものである。具体的な発表者と発表タイトルは以下のとおりである。

石川 登

「プランテーション型バイオマス社会の分野横断型研究—マレーシア、サラワク、クムナ川流域—」

加藤裕美・祖田亮次・Jason Hon

「マレーシア・サラワクにおけるアブラヤシ小農の土地利用形態と近年の動向」

祖田亮次・加藤裕美

「アブラヤシ小農の土地利用／認識の変化と都市—農村関係」

鮫島弘光・加藤裕美

「アブラヤシプランテーション拡大下での動物と人々の狩猟活動」



当プロジェクトの概要説明を交えつつメンバーの調査内容が紹介された。

まず、石川から本科研の意図が示され、これまでの4年間の研究活動の中で、どのような調査が行われてきたのか、何が明らかにされてきたのかについて、各メンバーの成果を取り入れながらの説明が行われた。本科研では、熱帯域におけるプランテーション

開発の流れは、社会的・経済的・政治的な動向から判断しても、完全に否定することは困難であろうという前提に立つ。このような現状のなかで、プランテーション経済と共存しうる在地社会のあり方を模索するという目的意識をもって、本科研は始まっている。

このような問題意識に立った上で、その調査の地域単位としては、クムナ川・タタウ川を中心とする流域社会とし、そこで、自然系・人文系が協働して調査研究を行ってきたことが強調された。

フロアからは、いくつか具体的な質問が投げられた一方で、「バイオマス社会」といった言葉の定義や概念について疑問が提示されたほか、認証制度や小農生産品の付加価値創出にとって何が必要なのかといった点も議論された。

第2報告は、加藤・祖田・ジェイソンによる「マレーシア・サラワクにおけるアブラヤシ小農の土地利用形態と近年の動向」であった。発表を担当した加藤は、衛星画像を解析した植生図と、現地調査によって得られた詳細な小農アブラヤシ畑の拡大プロセスを示した上で、小農のアブラヤシ畑の一筆一筆が非常に小さな単位であり、焼畑稲作の土地占有システムを踏襲したものであることを示した。また、華人などの外部アクターが土地の購入や賃貸を通じて先住民の土地に入り込んでアブラヤシ栽培をしている現状や、プランテーション開発に対抗する形での土地占有権／利用権の確保といった意味合いをもったアブラヤシ栽培の事例などを紹介した。

質疑の段階では、道路との距離を含む土地の価値基準や、従来の焼畑農業との関係性など、土地の権利意識や評価とアブラヤシ栽培の状況との関係性について、いくつか質問が寄せられた。また、土地の利用権・占有権・用益権と労働の組織化との関係性、あるいは、ゴムなどの既存の商品作物との土地利用競合関係など、多くの議論の材料がフロアから提供された。

第3発表（祖田・加藤）は、「アブラヤシ小農の土地利用／認識の変化と都市－農村関係」と題して、やや概念的な面から現在のサラワクにおける小農の状況が語られた。そこでは、サラワクの先住民社会におけるアブラヤシ小農には、片手間に栽培しているようなものから、企業的な大規模栽培まで、幅広いバリエーションがありながらも、時間や土地に縛られた形の農民は見られないことや、大規模プランテーションに強く依存することなく、一定の自律性を維持できていることが示された。また、それらの小農経営が可能になっている背景として、（元）焼畑民としての土地利用・認識のあり方や、慣習的な労働交換の再活用、新しい労働力であるインドネシア人の導入、サラワクの開発政策の制度的側面などが指摘された。

フロアからは、欧米の植民地において見られたプランテーション経済は搾取や収奪の構図が強くみられたが、そうしたプランテーション経済とどう違うのか不明瞭であること、今回の報告がアブラヤシ小農の一般的な発展過程の話ではなく、たとえばイバン社会論の中でどう位置づけられるのかについての議論が必要であること、などの指摘があった。

第4報告は、鮫島・加藤による「アブラヤシプランテーション拡大下での動物と人々の狩猟活動」と題する報告であった。発表の前半は、天然林（択伐コンセッション）と、プランテーション化の進んだ地域での、カメラトラップによる中・大型哺乳類の生息状況について説明がなされた。その結果として、多くの希少種は天然林地域にのみ分布するものの、スイロクやマメジカ、ヒゲイノシシなど、現地住民のタンパク源として重要ないくつかの種については、プランテーション化の進んだ地域でも一定の生息数があることが指摘された。発表の後半では、狩猟に関する聞き取り調査から、ヒゲイノシシの狩猟頭数が、村周辺の植生タイプと村の稲作世帯率の高さによって説明されることなど、自然的条件だけでなく、社会的状況によってもイノシシ捕獲数が規定されている可能性を示した。

質疑応答では、データの取得方法や分析方法等

についての具体的な質問がいくつか出されたほか、聞き取り調査によってより深いデータを収集する必要があるのではないかといった指摘もなされた。

（文責：祖田亮次）



プロジェクトの進展を紹介する資料も各種用意され活動の周知が図られた。

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川 登	人類学	京都大学 東南アジア研究所
研究分担者	祖田 亮次	地理学	大阪市立大学 文学研究科
	河野 泰之	自然資源管理	京都大学 東南アジア研究所
	杉原 薫	グローバルヒストリー	政策研究大学院大学
	水野 広祐	農業経済学	京都大学 東南アジア研究所
	徳地 直子	森林生態保全学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	内堀 基光	文化人類学	放送大学 教養学部
連携研究者	鮫島 弘光	生態学	京都大学 東南アジア研究所
	藤田 素子	鳥類生態学	京都大学 東南アジア研究所
	甲山 治	水文学	京都大学 東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	首都大学東京 都市環境学部
	津上 誠	文化人類学	東北学院大学 教養学部
	奥野 克巳	文化人類学	桜美林大学 リベラルアーツ学群
	市川 昌広	東南アジア地域研究	高知大学 農学部
	小泉 都	生態人類学	京都大学 農学研究科
	生方 史数	天然資源経済学	岡山大学 大学院環境生命科学研究科
	市川 哲	文化人類学	立教大学 観光学部
協力者	定道 有頂	ライフサイクル・アセスメント	日本エヌ・ユー・エス株式会社 (JANUS)
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学 白眉センター / 東南アジア研究所
	田中 耕司	東南アジア地域研究	京都大学 研究国際部学術研究支援室
	佐久間 香子	文化人類学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	小林 篤史	歴史学	政策研究大学院大学
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学 地域研究統合情報センター
	内藤 大輔	地域研究	総合地球環境学研究所
	Jason Hon	動物生態学	WWF マレーシア
	加藤 裕美	文化人類学	京都大学 白眉センター / 東南アジア研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Abdul Rashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lee Hua Seng	森林社会学	元 Sarawak Timber Association
	太田 淳	歴史学	広島大学 文学研究科
	鹿野 雄一	河川生態学	九州大学 工学研究院
	竹内 やよい	生態学	国立環境学研究所
	目代 邦康	自然地理学	公益財団法人 自然保護助成基金
	大竹 真二	映像人類学	モイ
	木谷 公哉	情報学	京都大学 東南アジア研究所
事務局	田中 園子	総務・会計担当	京都大学 東南アジア研究所
	中根 英紀	情報管理・発信担当	京都大学 東南アジア研究所

編集後記：

本ニューズレターはプロジェクトメンバー以外の方にも配信いたしております。

配信を希望される方は事務局：

(nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

またイベントのお知らせ、過去のニューズレターなどは当プロジェクトのホームページ：

(<http://biomassociety.org/>) で見るができますので、そちらの方もご参照ください。

(鮫島弘光)

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX:075-753-7338
<http://biomassociety.org>
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 鮫島 弘光 中根 英紀 (基盤S事務局)

身の回りの日用ラタン工芸品 (ウダウ村, ジェラロン)
(写真: 竹内 やよい)

